
外国語教育メディア学会 (LET) 第 52 回 (2012 年度) 全国研究大会に参加して

鈴木 幸子

外国語教育メディア学会 (英文名称: The



Japan Association for Language Education & Technology, LET) は、前身である語学ラボラトリー学会 (LLA) が設立されてから今年で 52 年を数える、多様な専門分野の教育者や研究者で構

成される学術団体である。この半世紀、視聴覚機器を利用した外国語教育を中心とする言語教育の理論と実践の研究を進めてきた。

第 52 回目を迎える全国研究大会は、2012 年 8 月 7 日 (火)・8 日 (水)・9 日 (木) の 3 日間、兵庫県神戸市東灘区にある甲南大学の岡本キャンパスで開催された。8 月 7 日は、9 時から 14 時 15 分まで 3 つの講堂においてワークショップが 8 件開かれ、私は「同時通訳テクニック授業活用法」と「図や映像とリンクさせた指導のあり方」に参加し、発表者が教室で実践している教授法を再現した模擬授業を学習者の立場で体験することができた。

今大会は「外国語教育における学習・指導・評価の最前線」をテーマに、140件に上る講演、研究発表、実践報告、ワークショップ、シンポジウム、展示、デモンストレーションが準備されていた。8日は会長挨拶に続き、「Second Language Fluency: Challenges for researchers and educators」と題されたNorman Segalowitz氏（モントリオール・コンコーディア大学）による基調講演1と総会・学会賞の表彰が午前中に行われた。午後は一般講演、公募シンポジウム、および山森光陽氏（国立教育政策研究所）の基調講演2「個人差と教育条件の織りなす動的状況における学習指導の位置づけ」のあと、18時から懇親会が開かれた。9日は午前9時半より各講堂で発表に続いて活発な質疑応答が交わされ、大会行事の最後を飾る荘島宏二郎氏（東京工業大学）の基調講演3「データからテストと人を評価する：潜在ランク理論と非対称多次元尺度法」、そして閉会行事まで発表者、参加者ともに有意義な時間を過ごした。

研究発表・実践報告は「教授法」、「テクノロジー」、「CALL・e-Learning」、「リーディング・ライティング」、「リスニング・スピーキング」、「コーパス・学習者要因」、「心理言語学」、「早期英語教育」など分野ごとに会場が設定されており、口

頭発表70題、ポスター発表10題、および公募シンポジウムが3件展開された。私は教授法を中心に参加したが、中でも「Developing Intercultural Communicative Competence Through Film Clips」の実践報告は興味深く、対象学生のレベルや反応、および評価方法について質問した。また、ポスター発表のうち、ペア・ワークに関する発表松本恭代氏（桐生大学）「Some Conflicts in Pair Work in the L2 Learning of Nursing Students: Good or Bad?」と三田薫、Samuel Gildart、荻野敏氏（実践女子短期大学）「事前・事後指導科目を通じて英語力と異文化理解を深める短期英語研修」が特に私の目を引き、その内容について発表者と対話できたことは収穫であった。状況は違うが、参考にしたい点はいくつかあり、現在抱えている課題について考える良い機会となった。活気に満ち溢れる雰囲気の中、興味深い講演、発表内容に猛暑も忘れ、講堂から講堂へと動き回った3日間であった。ICTが社会のさまざまな側面に大きな影響を与えている事実を踏まえ、デジタル技術に囲まれて育った学生に対応する教育方法、教育理念を研究し続けている研究者・教育者の方々と情報交換をする機会に恵まれ、大いに刺激を受け、神戸を後にした。
